

外国人児童生徒教科指導員の指導力向上のための研修の在り方  
—浜松市小中学校における外国人児童生徒等の教科指導について—

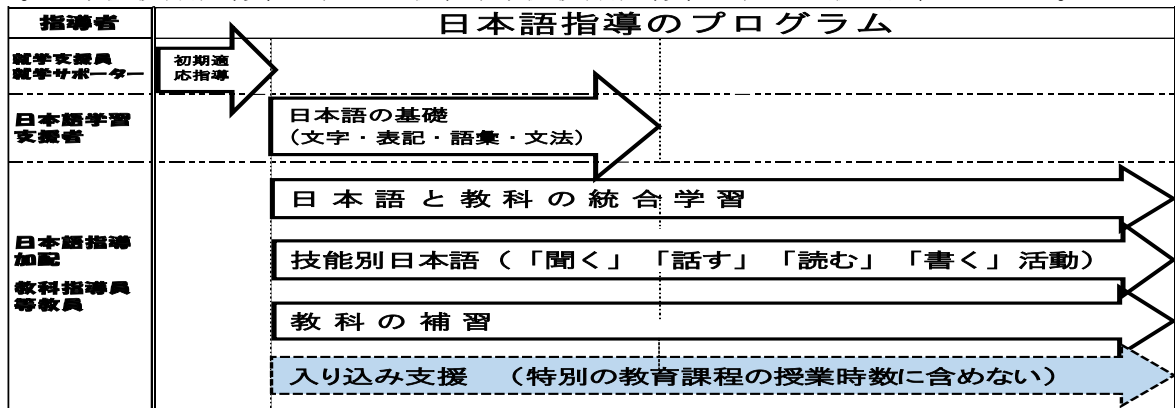
古橋水無（浜松市教育委員会）

1. はじめに

本発表では、外国人児童生徒教科指導員の指導力向上のための研修の在り方について検討する。浜松市立小中学校に在籍する外国人児童生徒等（以下児童生徒等）の 67.5%が日本生まれ日本育ちである。日本語指導を必要とする児童生徒等は、1,330人（R4.5.1）に上る。

浜松市では、日本語指導が必要な児童生徒への組織的・体系的な指導体制の充実を図っている。日本語指導については、担当者を明確にし、指導にあたっている。主としてバイリンガル支援者が初期適応指導を行った後、日本語・学習支援者（NPO への業務委託）が行う日本語の基礎指導を進めながら、教員が教科指導を行っていく。このような子供の学びがにつながる支援体制の整備に努めてきた。

外国人児童生徒教科指導員（以下教科指導員）とは、日本語指導が必要な児童生徒等が在籍し、加配措置されていない学校を主に配置している教員である。会計年度任用職員として週 10 時間または週 15 時間勤務し、「特別の教育課程」による日本語と教科の統合学習の指導を行う。小学校は国語科や算数科、中学校は自身のもつ免許の教科を中心に、他教科においても取り出し指導を行っている。小学校教科指導員 23 名を 22 校、中学校教科指導員 13 名を 13 校に配置している。



2. 研修の概要

教科指導員は、市教育委員会主催の年6回の研修会に参加する。悉皆研修である。研修会は、日本語指導加配教員との合同研修を3回、教科指導員独自の研修を3回行っている。文部科学省外国人児童生徒教育アドバイザー等を講師に指導を受ける。

①4/5	1. 講話「日本語指導体制と教科指導員の業務と役割について」 2. タブレット研修Ⅰ Chromebook の操作方法について	教育委員会指導主事 教育センター指導主事
②6/21	DLA 研修	東京外国語大学大学院国際日本学研究院 菅長 理恵 氏
③7/12	日本語と教科の統合学習Ⅰ 授業実践の動画視聴(小学校 国語科・中学校 社会科) 講話・指導	山梨県甲府市立大国小学校 今澤 悌 氏
④9/2	1. 日本語と教科の統合学習 学習活動計画の作成 講話・指導 2. タブレット研修Ⅱ Chromebook での読み上げ機能について	目白大学 人間学部児童教育学科 近田 由紀子 氏 教育センター指導主事
⑤10/24	日本語と教科の統合学習Ⅱ 算数科・数学科	早稲田大学大学院日本語教育研究科 池上 摩希子 氏
⑥1/20	1. 日本語と教科の統合学習 実践発表（グループ協議）と指導 ○在籍学級との連携について ○ICTを取り入れた授業について 2. タブレット研修Ⅲ デジタル教科書の使い方（国語科）	教育委員会指導主事 教育センター指導主事

日本語指導加配教員との合同研修—②・③・⑤ 教科指導員独自の研修—①・④・⑥

### 3. 教科指導員の課題と研修の目的

教科指導員は、前述したように1日の指導時間数が、3時間から4時間と短い。勤務時間内で、取り出し指導をし、学習記録や個別の指導計画(様式2)を作成しなければならない。また教員と連絡調整をする時間がほぼない中で、外国人児童生徒等への指導をしている。準備をする時間もままならず、当日、外国人指導担当、教科担当や担任から指示された内容を指導することもある。取り出し指導は、取り出すことで完結するものではなく、児童生徒たちが取り出しで学んだことを在籍学級で活かしてこそ、多くの学びにつながると考える。そのため、在籍学級と取り出し指導の連携を意識して授業を実践するために、今年度のテーマを「在籍学級の授業に参加できる力を育てる指導の工夫」とし、1取り出し指導の工夫、2在籍学級との連携方法について研修を行うことにした。また、GIGAスクール構想で、児童生徒一人に一台ずつタブレットが整備され、授業で使用していくことが推奨されており、使い方を学び授業の中で積極的にICTを活用していきたいという教科指導員の願いを受け、年間3回タブレット研修を位置づけることにした。

教員との合同研修では、講師の講義や実践を聞いたり(研修②・③・④・⑤)、日本語指導加配教員や教科指導員の授業実践の動画を見て話し合ったり(研修③)することで、日本語と教科の統合学習の考え方や方法等、理論的な面を学んだ。教科指導員のための研修では、授業の実践計画を立て(研修④)、実践を持ち寄って話し合う(研修⑥)ことで、自分の実践を深められるようにした。さらに、ICTを取り入れた授業実践を行うこととし、授業中に活用する機会を増やした。理論と実践の2つの研修を進めることで学んだことを次の実践に活かせるようにした。

## 4. 研修の実際

### 3.1. 取り出し指導の工夫

①在籍学級と同じ単元や学習内容を指導する、②学び方を身に付けさせる時間とし、在籍学級との足場かけをする、③児童生徒の日本語で考える力を育むために、担任や教科担任と情報交換し、在籍学級で取り組むと良いことを提案する、の3つを年度当初示し(研修①)、指導では、教科指導員一人一人がこのことを念頭に置き、実践を進めた。研修では、「日本語の目標」のたて方や、モデル文の示し方を学び、必要な日本語の表現を指導していくことを意識することにした。学習活動計画(単元の計画)の作成(研修④)では、「日本語の目標」を考え、交流の時間には、目標の妥当性や指導法の工夫について意見交換をした。

### 3.2. 在籍学級との連携方法

動画の視聴(研修③)では、自分が取り出し指導をする際、どのように在籍学級と連携できるかを考えながら、教員や教科指導員の取り出し指導の授業実践の動画を視聴した。授業実践を行うための「学習活動計画」の作成(研修④)では、一つの単元の流れを見通して、どの時間でどのような取り出しをすることで、在籍学級との授業につなげていけるか、児童生徒等の実態を考慮しながら、何時間目に取り出しをするとより効果的かを考えた。各々の行った実践を持ち寄り、情報共有や指導法の振り返りを行った。そして持ち寄った実践を実践集としてまとめた。(研修⑥)

## 5. 結果と考察

以上の結果、テーマを示すことで教科指導員自身が授業への見通しや目的をもって、実践を行うことができた。研修後の感想には、「昨年よりも、在籍学級の進度に合わせて、取り出し計画をすることやその結果として在籍学級での授業で、取り出し指導の成果が活かせることが、明確になった。」とあった。1年の中でこのような授業を行うことは数回だけだが、在籍学級との連携を考えた学習活動を計画し、担任や教科指導担当教員と共有することで、在籍学級との授業のつながりを意識し、取り出し指導をすることの効果を知ることができたと考える。また、日本語と教科の統合学習の指導法についていろいろな講師から学ぶことで、「動機づけや間接支援の重要性を学ぶことができた。」「グループで話し合うことによって、具体的に目標のたて方をイメージできた。子供の実態をしっかり把握した上で指導ができるように指導案を考えたい。」など気付きや深まりが見られ、その後の「学習活動計画」の作成に活かすことができた。

教科指導員が自らの指導力を向上させていくことは、一朝一夕に身に付いていくものではない。研修で理論を学び、日々の実践を重ねる、そのスパイラルにより、確かな指導力を身に付けることができると考える。今後も児童生徒等が在籍において日本語で学ぶ力を付けるための指導法や連携の工夫に関する研修を深めていきたいと思う。